

織宮結衣との創造世界

ALICE—A

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界は創り返られ、また滅ぶ。そしてまた創世が始まる。そんな事の繰り返し。そんな世界の狭間にいる織宮結衣というオルタナは、かなり変わった趣向をしている。

結衣は、普通ならできない事や想像上でしかやらなそうな事もやろうともしている。彼女にはパートナーとも呼べる人が近くにいます。

それが俺である。某学園のキャプテンを務めていた俺であるが、知らず知らずに結衣に恋を抱いていた。

俺が結衣に告白をした後にすぐさま付き合い始めた頃からの話である。

※以下注意書き

- ・キャラ崩壊が要所所所であります。
- ・ゆいんご推しである俺が書くので、イチャイチャ要素が所々にありますご了承ください。
- ・ごち俺でも書いてたりしてたけど、ネタが所々にあつたりします。
- ・→分かんなかったら調べましょうね（投げやり）→
- ・ゆいんご可愛い、めいんごもつと可愛い、最高!!! 優勝!!!

目次

零	—	Daily	introduction	1
壹	—	Sweetness	is more	1
二	—	Beautiful	than	5
三	—	Cuteness	—	5
四	—	Reason	Collapse	13

零 —Daily introduction—

都内某所、結衣と俺はとあるカフェに来ていた。

結衣「話つて、どうしたの？」

俺「あのさー結衣：俺んとこの本棚を整理するのはいいんだけどさあ…」

結衣「何かヤバイものでも入れてたっけー？」

何事もなかったのよう言い返した結衣。

俺「あのー…どうしてブルータルデスメタルガイドブックが入れているのかね？」

そう、結衣はちよつとどころかかなり変わった趣向がある。

彼女の名前は織宮結衣。 某学園の生徒である。

日々特訓を積み重ね、強大な獣と戦う事の繰り返しをしている戦闘員の一人でもある。

結衣は元々本が好きで、幼い頃から本を読んではかき集める癖がある。

そのせいか、結衣の部屋には数千冊は入るのであろう本棚がいくつもある。

ここまでなら、一部文系出身者にありそうなのだが問題はここからだ。

恋愛小説、地学参考書、同人誌：

…と、ここまでならなるほど分かるってレベルなのだが。

結衣「ブルデスとかデスコアとか同人系統のCDで棚埋まっちゃってるから、あの棚に入れておいた。」

そう。結衣は（俺の影響か）よくメタルを聴くようになっていて、所々にメタル系のCD等が棚に飾ってある。

なお、俺のメモにはこう書いてある。

普段は読書するのが日課だが、ライブに行く時はモツシャーへと豹変する。

もちろんリズム感覚が特技なのでかなりガチ。

変拍子を刻む事は朝飯前らしく、運動嫌いをそれらで（？）克服しているらしい。

甘い声とは裏腹に動きや音楽に関してもガチ。

こういう事だ。ぶっちゃけ言うのと、ギャップが激しい娘なのだ。

俺「んで、整理してたら何故か俺のどこの棚に混じってたわけか。」

結衣「怒ってない？」

と言い、結衣は反省したげな顔で俺を見つめてきた。かわいい……

俺「だいじょーぶって！俺も最近ブルデスに疎くなつてたからさあ。」

そう言うのと結衣はほっこりと笑顔を見せた。かわいい。

結衣「はー、それならよかったー！」

俺「というか結衣ー。ここにきてもう3時間経つけど、クラブパン何個目だー？」

結衣「わかんない。だけど、かなり食べた感じはある。」

自慢げに答える結衣。

俺「もう六時か……そろそろ帰るかー。」

結衣「そーだねー。」

翌朝

相変わらず、すやすや眠ってる結衣を横目に俺はそそくさと学校にむかった。

その数分後に結衣は目が覚めただろう。

『ピンポン』

結衣「こんな時間に誰だろう…」

玄関を開けると、どこぞでアイドルを目指しているチーム同期の桜子がいた。

桜子「ゆいんごー、スタジオいこー！」

朝からこの調子である。首を縦に振る以外、手段はない。

結衣「オツケー。ちょっと準備するから待ってて。」

まだ、結衣との生活は始まったばかりだ。

壱 —Sweetness is more beautiful than cuteness—

昼下がりのこの時間帯、結衣と桜子は音楽スタジオに来ていた。

時間が時間なのか、割と空いていたようだ。

結衣「相変わらず懲りないねえ…」

桜子「そりゃーそうでしょー。平日割安プランだったし、やるにしてもこの時間帯ぐらいしかなかったからさー…」

結衣「それなら、しょうがないね。」

そして、数分後スタジオ入り。

桜子「今日はどうするー?」

早速そう言いつつ、マイクを手にとりコードに接続する桜子。

結衣「というより、何でわざわざスタジオ借りる必要があったの?」

桜子「そりゃあ…学園内のラウンジとかじゃあ、皆に迷惑かけちゃうかもしれないし…」

なるほど、と溜め息をつく結衣。

結衣「どうりで：それで、今日は何を叫ぶつもりなの？」

桜子「とりあえず、Suspicion & Fearの「The Restorati
on Of Imperial Rule」からでー。」

一方俺はというと、友達と何気なくいつもの会話をしていた。

話題といつても、最近の東方メタルの傾向や洋楽の話等がメインだ。

内容はというと、Fleshgod Apocalypseの今年リリースした新譜
の事だったり

SUICIDE SILENCEの新曲についてだったりと多少の流行り遅れが
あったが俺はそんな事は一切気にしてない。

むしろ、今気になるのはある事。

結衣が例の事で熱を入れすぎていないかどうかだ。

学校から帰る最中で、偶々音楽スタジオを見かけた。

何気なく予想してスタジオに顔を覗かせてみた。

やはり、なんとなくだか予感的中してたようだ。

「This is the coldest song」

「a voice could ever sing」

俺「おい、結衣ー？」

結衣「わっ…?! キャプ…テン…！」

結衣「キャプテン…やっぱりここだつて、気づいてたのね。」

俺「そりゃあ、結衣の事だし…また桜子とメロデスやら色々練習したい時期が来たんだろうなあつて俺は思っただけだしな。」

結衣「うう…」

俺「そんなに恥ずかしがらなくていいんだからさあ、結衣は結衣でいてくれればいいんだからさ。」

そう言うなり、結衣は微かに笑顔を見せてくれた。 かわいい。

結衣「ありがとう、キャプテン。」

桜子「んでねえ、指摘するなら一つだけだね。 音量がちよつと足りてない。」

結衣「了解。」

俺「結局2人は何の練習してたのか？」

結衣「桜子がフライの練習しようって言ってついてきたつもりなんだけど、私もやる羽目に…」

桜子「結局練習してみたけど、あまり調子は変わんなかったんだけどねえ。」
なるほどな、そういう事だったか。

結衣「じゃあ、私は帰るけど桜子は…どうする？」

桜子「あー、もうちよいだけ練習していくねー。」

そして、軽くご飯を済ませた俺と結衣はひと段落ついた。

疲れからか、結衣は眠たそうな表情を見せた。相当頑張ったんだな。

俺「寝よつかー。」

結衣「うん。」

そう言うなり、俺は結衣と一緒に布団に潜り込む。
どことなくだが、暖かくて…幸せだ。

眠たそうな表情を見せていた結衣だったが、急に俺の頬をツンとついてきた。

俺「んー、結衣ーどうしたん？」

結衣「んーとねー…」

そう言うと、結衣は俺に対する想いを簡単にまとめた。

結衣「キャプテンと一緒にいるとねー…何か気持ちが楽になるといふかー…」

俺「ハツキリ言っちゃってもええんよーw」

そう言つて俺は結衣の頬を突いた。

それと同時に結衣が可愛げな声で驚いた。

結衣「ひやつ?!」

そう何度もしているうちに、頬をつつく頬を撫でられる…

こんなやりとりをしているうちに、どこどなく幸せな雰囲気にも包まれている気がして
きた。

最高に可愛い表情をしている結衣が目の前にいるんだもの…

< Feelings of the back >

…俺つてこんなに幸せでいいのかな…

< End the thought of the back >

こんなやりとりを続けたあとに、結衣が囁いた。

結衣「ねえ、キャプテンー。」

手を猫の手みたいにグルンと包む結衣。

俺「どないしたーんー結衣ー？」

結衣「あのねーえー・・・／＼」

もじもじと照れながら、眠そうながら布団の中に潜り込んで見つめてくる結衣。か
わいい。

結衣「明日、ちょっと行きたいところがあるんだけど…いい…かなあ…？」

そういえば明日は休日だったな。出かけるのにも良い頃合いだ。

俺「おお、そうだな。んで、どこに行きたいのかなー？」

結衣「ディスクユニオン。」

俺は、結衣が行きたい理由が何となくわかった気がした。いや、無論しなかったら
どうなんだ…

翌日、俺と結衣は例の店舗に来た。

俺「何となく探してるモノは察したけど…そっか、アレ持つてなかったのね。」

結衣「シンフォニックを私の身に取り入れたかった。…なんとなく…」

そう言つて手に取つたのはFleshgod Apocalypseの「King」であつた。個人的には「A Million Deaths」が好きだ。

しばらく周つてる間に、結衣がまだモノを探してるようだ。

俺「結衣ー、どうしたー？ Agonyなら確かもう持つてたはずでしょー？」

結衣「あつ…そうだった…／／」

何気なく在庫を気にするより、家にあるCDリストを完全には覚えきれてなかつたよ
うだ。かわいい。

俺「それだけで大丈夫なんか？ 結衣ー。」

結衣「問題ない。聴いてて全然飽きないから。」

結衣は自信気に答えてくれた。

俺「んじやあ、ちよつくらクラブパンでも買つて帰りまつかう。」

結衣「わーい、キャプテンだーいすきー。」

言うなり抱き着いてきた結衣。ここは天国か？ 俺はまだ生きてるか？

都内某所

結衣「んで…？なんでまたメイド衣装着せられる事になったのか…教えて…」

桜子はゆっくり頷く。

桜子「そりゃあ…カラオケで負けたからに決まってるじゃん？もっかい挑戦してもいいんだよ？」

結衣「臨むところだ…」

桜子「じゃあ、次から1回負けたら…」

結衣は何かに察しつつ、その言葉に耳を傾けた。

桜子「デープキス1回…ね？／／／」

式 —Reason Collapse—

桜子「それでさあ…」

結衣「なーにー？」

桜子「着てもらったのはいいんだけどさ…何故…そう…隠すわけ？」

結衣「だっ…だっ…だっ…／／／」

桜子「恥ずかしかつてるようじゃ、アイドルは務まらないよ？」

結衣「じゃあ…桜子に一つ質問」

桜子「ん？なーに？」

結衣「どうして…こども露出が多いわけ…？」

一方俺はというと、妃十三学園のラウンジ清掃をしていた。何故だ。俺「まったく…どうやったらそもそもこんな散らかるんだろうか…」

詩音「キャプテン、どうかしました？」

俺「ああ、どうもお菓子だったり煮干しだったり散らばってるようだね…」

詩音「おそらくそれならこはるちゃんかつむぎちゃんが…」

…またあいつらか…

俺「おーい、ちよいといいかー？」

こはる「ふえー？」

相変わらずのとぼけっぷりのこはる。

俺「ラウンジのテーブルに置きっぱなしになってるシュークリーム、あれこはるの分か？」

こはる「そうだけどー？」

俺「食べないのか？」

こはる「食べよーとは思ったけどー、お腹一杯でねー…」

相変わらずのすつとぼけよう。

俺「だったらせめて冷蔵庫に入れておこうな…一応入れておいたけど。」

こはる「ありがとー。」

俺「あ、あとーこれからシュークリーム作る時は器具の片づけもちゃんとしておけ

よー。」

—作るのはいが、もう少しシユークリームの味バリエーションを増やしてくれないかね……—

俺「つむぎちゃん、ちよいといいかなー？」

つむぎ「どうしたのー？」

俺「ソファアのまわりでねこちゃんと遊んでたよなー？」

つむぎ「そーだよー。ねこちゃんがーあそびたがってたのー。」

俺「…遊ぶのはいいけど、何故煮干しがバラまかれてるんだ…？」

つむぎ「そりゃーねこちゃんを誘き寄せる為だよー。」

俺「んー…まあ誘き寄せるのはいいんだが、なにもそこまで大量に使う必要あったか？部屋まで煮干しの形跡があったのだが。」

つむぎ「ねこちゃんと戯れたかったのー。一緒ににやんにやんしたかったのー。」

察し。

俺「まあ、今後は一匹ずつでもいいから煮干し持ちながら誘き寄せような…」

つむぎ「うん！わかったー！」

納得してもらえただけでもありがたい。

俺「とりあえず納得はしてもらえたようだし、片付けも済んだなーふうー！」

詩音「キャプテン、お疲れさまです。」

俺「詩音さん、ありがと。」

詩音「あ、そういえば恋さんがカラオケルームに来てとおっしゃってたような…」

俺「へっ…?」

どうせあの事だろうと予想しつつ向かう事に。

俺「恋さんよおー、またアレか？ウインドミルの練習ついでに叫んでいかねーかってか?」

恋「そうなのー。　　というかいつも通りやんないとモチベ持たないのよー。」

俺「てか、美弥花と練習すればいいもの…何故俺なんや…?」

恋「いいじゃなく！時と場合ってあるだろうからーねーダーリン?」

俺「だからその呼び方…」

恋「とりあえずまずはブレイクダウン地帯でウインドミルと発展型の練習でー。」

俺「話聞けよ…」

恋「その後ふおあぐらのあのパートの練習かなー。」

俺「ウインドミル発展型って、俺のやってるやつか…わかった。」

恋「ありがと〜ダ〜リン！あつ…そうだ。」

俺「ん？どないしたん？」

恋「桜子ちゃんと結衣ちゃんは？」

俺「ああ…それなら…」

その頃、都内某所

結衣「んうう…うふう…ふああ…／／／」

桜子「あつるえー？ゆいんごもうギブなの？」

結衣「そういう問題じゃなくって…／／キス…長くない…？」

桜子「気のせいよきつと。」

結衣「それで、次はなんだって？」

桜子「わしわしの刑。」

結衣「まったく…私より胸無い事を口実に…」

桜子「なっ…!くおおのお…!」

言うなり結衣の胸をガシつと掴む桜子。

結衣「きやあっ!?!なっ…!」

桜子「なーんだ結構あるじゃーんゆいんごー。」

結衣「…それがどうしたっていうの…」

桜子「ほーうらー、もったいぶらずにーっ。」

結衣「…っ!／／」

思った以上に感触があつて、思わず桜子も顔を赤らめる。なぜだ。

桜子「…私もこれくらいあつたらなあ…」

と、その時だった。

外から声がする。

??? 「まったく…どこのどいつも腹から声出せてないわけだか…」

桜子「ん?この声は…」

同じ頃

千穂「なんで腹から声が出てないんですか？出せないんですか？」

「出せるけどさあ…まだ始めたばかりじゃん、いきなりデスラッシュから始める奴なんて千穂ぐらいしかみないぞ…」

そう、何故だか俺は千穂にカラオケに連れてこられていたのだ。

俺「で、何故ここを選んだんだ？」

千穂「なんとなくなんですが…何気に誰かの咆哮が聴こえてきたからです。」

勘が鋭すぎるぞ、千穂よ。

俺「ああ…結衣の事だろ。でも何で俺まで…っ」

言うなり机をバンツ！っと叩きつける千穂。

千穂「結衣さんの事が好きなんでしょ？仮に結衣さんが大事に巻き込まれてたらどう責任をとるんですか?!」

冷静に考えてみれば、確かにそうだ。

俺「確かに千穂の気持ちも分かるが、あまりにもベツトリしても…千穂もその立場

だつたらイヤだろ？」

千穂「私は…従順な犬共が這いつくばっても困る事はありませんが？」
やつぱりどこか次元が違う。

俺「なら別に構わんのだが…って、そういう話だつたっけ？」

千穂「…確かにそうでしたね。ちよつと様子をみてきましようか。」

桜子「ん？この声は…」

結衣「どうしたの？」

桜子「ちーちゃんだ…ちーちゃんもカラオケに来てたんだ。」

結衣「えっ…」

何気にメンドクさいようだ。

先に見つけた桜子が声をかける。

桜子「やつほー、ちーちゃーん!!!」

千穂「やはりいましたか…私の憶測通り。」

千穂「それで、お二方は今日は何をしてたんですか？」

桜子「こつちこそ訊きたいよ〜〜」

千穂「…私はちよつと暇しに來ただけですよ。桜子さん達は何をしてたんですか？」

？

桜子「アイドルになる為の特訓！」

千穂「例えば？」

桜子「えーつとねえ〜…えーつと…」

桜子「あ！そうそう、十八番の練習とかアイドル衣装のチェックとか！」

千穂「へえ…ちよつと待つててくださいね。」

俺「ちよつと待つて!!!一旦落ち着いて!!!ねえ、千穂様!!!お願いだから落ち着いて!!!」

千穂「どういう事ですか？アイドルの衣装チェックつてまさか卑猥な事を認可してるわけじゃないですよね?！」

俺「俺は認可したわけじゃないから！外出許可もちゃんと理事長を通して得たから

!!!

千穂「そうですか…なら真意を訊いてみますか。」

千穂「結衣さん、正直に話してもらえればすぐに終わるのでよく聞いててくださいね。」

結衣「うん、わかった。」

千穂「桜子さんとカラオケに行く事はよくありますか？」

結衣「うん、いっつも練習しに行ってる。」

千穂「キャプテン…どういう事ですか？いっつもってどういう事ですか?!」

俺「一応これに関しては常に外出許可をとってるから問題ないんだよ。」

千穂「はあ…そうですか。次の質問です。今日、桜子さんになんかされたりしましたか？」

結衣「う…うう…」

桜子「衣装チエックしてたよ？」

しばらくだんまりをキメ込んだ結衣、

結衣「あと…桜子に…キス…され…た…／／／」

一瞬にして空気が凍りついた。

千穂「…どういう事ですか？キャプテンがどういう事を教えてたらこんな事になるんですか?!」

俺「俺は何も悪くないからね?!俺は…何も悪くないからね?!」

千穂「流石のキャプテンであろうと、ここまで甘えがあるなんて信じられません。私は帰ります。」

俺「ちよっ…!ちよ…待っ…!!千穂お!!!」

桜子「私は…悪くないんだからあ…」

俺「まあ、気持ちも分かんなくはないけど…どうしてそういう展開になったの…?」

結衣「私が着てた衣装の露出が多くて…したら桜子が…」

桜子「もーうっ!だってえ…あんなに恥ずかしそうにしてたから…思わず…」

結衣「でも…ちよつと…気持ちよかつた…かも。」

俺／桜子「？！」

桜子「…ちよつと…やりすぎた…かも…？」

俺「だああああ!!!桜子おとおお!!!一体何を開発させようとしたんだ一体?!?!」

桜子「いや…私は…ただ単に…」

俺「ぬおああああああ!!!」

それからというものの、俺が結衣と戯れている時になるとこうなる。

結衣「キヤ〜プテン…触つて…ほしいの…／／／」

俺「お…お…」

桜子よ、
ある意味GJ